論文二の三

古城サン・ジョルジェの激震
―イギリス人神父ゴダールの証言

さる十一月一日午前九時十五分頃私は城（サン・ジョルジェ城）へ散策に行きました。そこは全市のもっとも高い地点にあたり、沿岸のいかなるところよりも雄大なな眺望が得られるのです。〔中略〕

こうして城砦の砲台へ踏み出したとき、私の瞑想は馬車数台のような騒音に中断されました。そうした場所でいまだ耳にせぬような騒音で、多少の震動を伴ったため、とくに馬車の音かと私は推断しました。しかし、すぐさま誤りを悟り、極度の戦慄に包まれました。 大地の震動が極度に激しく、倒れかかる自分を辛うじて保ち、数歩先の旗竿に寄りかかって身を支えました。

（リチャード・ド・ゴダールの書簡）

第一節　リスボンへの旅路と在留民の歓待

一一四七年ポルトガルの初代国王アフォンソ・エンリケスは、イギリス十字軍船団の支援を得て、難攻不落のリスボンを攻囲し、四百年ぶりにイスラム勢力から奪還した。王国の首都も一二五五年コインブラからリスボンに移され、ムーア人の創建によるサン・ジョルジェ城で、以後十六世紀初頭までポルトガル宮廷が営まれた。一四九九年インドより帰還したヴァスコ・ダ・ガマが、新航路開拓の報告を呈したのもこの城内である。

テージョ河畔にリビエラ王宮が造営されたのち、サン・ジョルジェ城は王国軍の本拠となり、牢獄や古文書館も付設されたが、城郭の一部は次第に廃墟と化した。王侯貴族のグランド・ツアーが始まると、西はリスボンより東はイスタンブールに至る旅程が人気を集め、アルファマ丘陵のこれなる古城が観光名所のひとつとなった。

敷地には広大な庭園が拡がり、そこから旅人はリスボン市街とテージョ流域を展望したのである。

海洋帝国の首都リスボンは、ヨーロッパからアジア、アフリカ、アメリカに向かう交易、いわゆる三各貿易の重要な基点であり、大地震発生の時点にも各国の貿易商や外交官が多数居合わせた。また、気候温暖で風光明媚なポルトガルへは、保養や療養のため大勢の外国人旅行者が滞在した。これら在留民の綴った被災記録は、長文の報告をも含み、さまざまな様相や局面の証言として独自の価値を有している。彼らについては各々の人間形成、家族関係、社会的地位などに関する資料が比較的豊富であり、大地震の社会的衝撃がいかに広汎で深刻化を認識させる。

大地震が発生した一七五五年十一月一日、リスボンに滞在する旅人のなかに数名の著名なイギリス人がいた。これらの貴紳（ジェントルマン）が綴ったまた、

そうした被災者のひとり、リチャード・ゴダールは一七二八年イングランド南西部、ストンヘンジで知られるウィルトシャー州スウィンドンで生まれた。その生家は同州きっての名門貴族であり、十六世紀中葉ヘンリー八世から荘園スウィンドンの領主に封ぜられていた。五千エーカーに及ぶ領地、広大な森林、草原、牧場を有するゴダール家の事業は、スウィンドンの歴史そのものと評される。一六二六年に領主は週一回の定期市、年二度の共進会を認可し、家畜等の物々交換も人気を集めた。十八世紀初めにはロンドンで砂糖や紅茶を仕入れた雑貨店も開き、石灰石の採掘事業も開始される。①

領主の次男としてリチャードはオックスフォードのニュー・カレッジに入学し、一七五三年に法学士の称号を得るとともに、ウィルトシャー州ラコックの助任司祭に任じられた。② また、一歳下の三男アンブロワーズ（子）は、ウインチェスター学園で実業家への素地を培い、毛織物の貿易商としてリスボンに邸宅を構えた。一七五五年家長のアンブロワーズ・ゴダール〈親〉が逝去して、長男トーマスが家督を相続した。長男が領主となり、次男が聖職者の道へ、三男が実業界へ入るのは、地主ゼントルマンの典型的な身の処し方と言える。

同年十月の中頃プロテスタンントの神父リチャードはパケット船によりポルトガルへ旅立ち、アンボワーズの邸宅に寄寓した。旅行の目的は温暖な土地での療養とされるが、リスボンで営業を始めて間もない弟アンブロワーズを見守るためでもあろう。大聖堂に近い彼の邸宅に、ゴダール＝ブランフィル＝ジャクソン商会の事務所が置かれ、ふたりの貴紳ウィリアム・ブランフィルとジョン・ジャクソンが共同経営に参加していた。ブランフィルはロンドン・シティの貿易商ウィリアム・ブラウンドの甥、ジャクソンは南海会社支配人フィリップ・ジャクソンの子息であり、彼らと弟との共同経営が円滑に進むか否かも、ゴダール家には気掛りであった。リスボンからの第一報でリチャードは、旅

---

① Richard Jefferies, *A Memoir of the Goddards of north Wilts,* London.1873. pp. 13, 19.　History of Swindon. on-line Goddard family. Wikipedia. on-line

② Mark Molesky, The Vicar and the Earthquake, Controversy, and a Christeing during the Great Lisbon Disaster of 175. in JPH, vol. 10, number 2, Winter 2012, p.78.

路の状況と現地での経営についてまず記述する。①

ゴダール　一七五五年十月二二日付長兄宛書簡（その一）

発信：リスボン、一七五五年十月二二日
宛先：リチャード・ゴダール

兄トーマスへ

拝啓。あまりにも長くファルマウスに留められたのち、ようやくリスボンからお便りする喜びを得ました。ここへ到着した私は、アンボワーズの元気な姿に接しました。以前とすこしも様子が違いません。このような報告にさぞ安心されると思いますが、あらゆる面で期待通りか否かは、まだ確言できません。昨日の朝ブランフィル氏と乗馬に出掛け、弟や弟の使用人と意気投合したように見受けました。彼についてなんの不都合も感じません。弟の家ほど便利に過せるところはリスボンにない、と率直に言うのです。リスボンへの旅は自分の覚束ない健康のためでしたが、体調が良くなったように感じ、元気になれるように思います。先回そちらにお便りしたのが、九月の何日か思い出せません。ファルマウスを呪いながら、その手紙を書きました。あまりにも不運で私たちは、風向きのために三週間もそこに引き留められたのです。しかし、ついに運行が可能となり、順風に乗って九七時間ほどで大陸まで来て、テージョ河に投錨しました。この河を遡上しながら、水辺の玲瓏たる田園の美観や王都の眺望に接する楽しみを、しばしばあなたから聞きました。しかし、夏の陽光で熱せられた田園が、荒れ果てた不毛の土地のように映じ、そうした眺めを私は楽しめません。王都へ近づくにつれ、夕闇が迫りました。しかし、都会の輪郭が現れても、リスボンらしい光景は見当らないのです。甲板に一時間ほどいたのち、ようやく思いのまま船室へ戻りました。（乗客の人数を考えれば、耐えられない牢獄ですが）そこから離れる必要も気持もありません。②

助任司祭リチャード・ゴダールは一七五五年の九月下旬パケット船（定期船）に乗り、リスボンへ出発した。本来パケット船はヨーロッパの沿海部で郵便を輸送するものであったが、やがて資材や商品を積み、北米やアジアへも出航していた。イギリスからポルトガルへはイングランド南西のファルマウス港が運航の基点とされ、十八世紀には外交官や貿易商はもとより、一般の旅行者もこの定期船を利用した。小型の船舶として性能を誇り、順風では九十時間でリスボンへ到着するが、狭い客室と激しい揺れのため快適な旅とは言えない。大西洋の荒波や濃霧にも遮られ、積み込まれた財貨が海賊の標的ともなった。③

アンブロワーズが一翼を担うゴーダール＝ブランフィル＝ジャクソン商会には、著名な貿易商ブラウンドの後盾があった。ロンドン・シティの有力な実業家であり、東インド会社の一翼を担う彼は、ポルトガルへの通商を重視し、毛織物等の輸出にあたり関し卸売業を続けた。一七四〇年代にブラウンドはイギリスやオランダの企業に代理店を依頼し、大地震の直前には直系の商会を設立し、さらなる飛躍を意図していた。④ なお、ジャクソンの父が采配する南海会社は中南米を版図とし、一七二〇年のバブル崩壊で政治問題を惹起しながら、有力な貿易企業として十九世紀中葉まで存続する。ゴーダール＝ブランフィル＝ジャクソン商会の背景には、イギリスを基点としインド、ポルトガル、さらには中南米にわたる壮大な貿易ルートが見えてくる。

ゴダール　一七五五年十月二二日付長兄宛書簡（その二）

① Edward Paice, *Wrath of God, the Great Lisbon Earthquake of 1755*, London, 2008. p.60.
② Richard Goddard, letter dated 22 October to Thomas Gaddard, pp.1-2. British Library Ms.Add. 69847 A-M item F.
③ Paice, *op.cit.*, p.1-2.
④ H. E. S. Fisher, *The Portugal Trade, a Study of Anglo-Portuguese Commerce 1700-1770*, London, 1971. pp.56-57.

リスボンの岸壁を望める地点まで私たちは進み、あらかじめ定期船到着の報知が届いたらしく、弟と一群の知己が上陸を出迎えました。旅の間私は船酔いで体調が悪く、寝台に横たわり、休養が必要でした。最初の三日か四日は恢復せず、領事ご自身をはじめ、英国商館のお歴々が見舞に来て、慇懃に挨拶されました。海外で迎えた最初の日曜日には教会の前で大使と待ち合わせて、鄭重な歓待を受けました。その日は予約どおりポルトガル駐在大使やブランフィル氏と夕食を共にしました。私自身や私の職業に敬意を払われたのか、別れ際に大使が親切にも申されました。時々食事を共にできれば喜ばしく、またほかの用事がなければ、日曜毎に教会で出向いてほしい、と。①

リスボンにおける英国商館はイギリス人貿易商の統御と交流のため十五世紀に設立された。当初繊維製品の門に限られた彼らの特権は、一六五四年の条約によって著しく増大する。イギリス人の居留地と商館は、リスボンのほかポルトやアヴェイロなど沿岸都市に拡がる。これらの商館はポルトガルの司法権から相対的に独立し、イギリス国王に任命される領事の管轄に置かれた。②また、本国から着任する専属の医官と司祭も商館の重要な構成員であった。

学士号を持つ聖職者としてつとに名を知られるリチャードは、商館挙げての歓迎と待遇を受けた。また、埠頭で彼を出迎えた一群のなかには、ゴダール商会の共同経営者や社員だけでなく、当地のプロテスタントも含まれたであろう。英国商館専属の司祭ジョン・ウィリアムソンは、ミサにおける補佐役をリチャードに依頼した。なお、彼と夕食をともにした駐ポルトガル全権大使は、地震発生の直後イギリスで安否不明と噂されたアブラハム・カストレスである。

第二節　サン・ジョルジェ城における巨大地震の衝撃

リチャードが寄寓した弟アンブロワーズの邸宅は、アルファマ丘陵の中腹、ペドラス＝ネグラス街にあった。大聖堂に通じるこの街路は、閑静な外国人居住地ともいうべく、貿易商トーマス・チェイズが高層建築の一角に居を構えたことは、本稿第三節で述べたとおりである。ペドラス＝ネグラス街はかなり長い坂道であるが、大聖堂に接するの東端には参道と拱門が築かれていた。同じ高層建築でも、大聖堂に一層近い区画にアンブロワーズの邸宅があった。多くの貿易商と同様に彼の事務所は自宅に置かれ、共同経営者のブランフィルとジャクソンもそこに勤務したと思われる。万聖節の朝これら三人の貿易商は事務所を離れ、顧客まわりのため市中に出向いた。

丘陵の中腹にある彼らの邸宅は、バイシャ地区の繁華街へも、山頂サン・ジョルジェ城へも近く、商易と観光に至便の地点である。ペドラス＝ネグラス街からサン・ジョルジェ城へは直線にして一キロに充たないが、一般の道路は山腹を迂回して、サンタ・ルチア展望台などを通り、相当の距離となる。他方険しく狭いコレイラ古坂やサン・クリストヴァンの石段は、真直ぐな道の両側に、古びた家屋が連なり、情緒ある町並みとして好まれる。大地震を伝えるリチャードの第二書簡には、こうした丘陵での朝の散策が叙述される。

ゴダール　一七五五年十一月十八日付友人宛書簡（その一）

発信：ポルトガル、マラヴィラ、一七五五年十一月十八日

親愛なる友へ

お互いのよしみでこれなる世界の一隅より、珍しい話題を供されるとかねて期待されるあなたは、この手紙を手に

---

① Goddard, letter dated 22 October, pp.2-3.

② V.M.Shillington and A. B. Chapman, *The Commercial Relation of England and Portugal*, London, no date. pp.64, 189-191, 227-230.

されるまえに、リスボン壊滅の暗鬱な報知をおそらく得られ、今回の便りがなければ、不幸な都と私が運命を共にしたと、かならず信じ込まれたでしょう。かの怖ろしい光景をあなたに若干報告できることを神に感謝しつつ、それが到底正確でも完璧でもないのをお赦し願います。哲学的であるよういかに努めようとも、周囲全体が恐怖と混乱に覆われるなかで、冷徹で不動の傍観者であったと装うつもりはありません。リスボンの地震について公衆を納得させる厳密な報告を、まもなくあなたは入手できるので、私自身の物語だけで充分でしょう。

リスボンへの旅は主として大気の恵みに浴するためであり、天候が許すかぎり、そうした機会を逃さないことは当然お察し頂けるでしょう。そのような陽気に恵まれ、さる十一月一日午前九時十五分頃私は城（サン・ジョルジェ城）へ散策に行きました。そこは全市のもっとも高い地点にあたり、沿岸のいかなるところよりも雄大なな眺望が得られるのです。城楼自体は廃墟にすぎず、砲台に備わる錆付いた大砲も用いるよりはむしろ見せるためなので、眺望がよいという私の報告も役に立つと思います。半時間ほど散策して引き返す地点に立ち、英国商館の教会で十時半から牧師の礼拝に付き添うことを念頭にしながら、ポルトガル到着後もっとも快適な朝の喜悦、大気の温暖さ、かつまた展望の美しさによって、できれば散策をもうすこし続ける気持になりました。自分の歩調を考えて、八分か十分延せると思います。摂理によるとさえ感じるこうした快い気分の転換が健康の保持のためよいのです。こうして城砦の砲台へ踏み出したとき、私の瞑想は馬車数台のような騒音に中断されました。そうした場所でいまだ耳にせぬような騒音で、多少の震動を伴ったため、とくに馬車の音かと私は推断しました。しかし、すぐさま誤りを悟り、極度の戦慄に包まれました。大地の震動が極度に激しく、倒れかかる自分を辛うじて保ち、数歩先の旗竿に寄りかかって身を支えました。これに加えて群衆の驚愕が私を動顛させ、脇を駆け抜ける男の悲鳴も、ポルトガル語の叫びながら怯えた表情とともに、不測の事態を紛うことなく認識させます。そして、言語に絶する光景と言うべく、いま眺めた古城の上部、老朽化した高楼が崩れ始め、周囲の建物もそれと運命を共にしたのです。次第に震動は弱まったので、最悪のときは過ぎたと思い始め、座り込んだ人々も身を起しました。しかし、彼らが立ち上がるや否や、勢いを増して震動が再発し、あらゆる事物を必然的な破滅に突き落すかのようでした。このとき私が目撃した混然たる怖るべき光景は、いかなる言辞によってもお伝えできません。もしも後世に伝えるとすれば、それほどの出来事を目撃したとしか言えないのです。それまで輝いていた太陽が倒壊した建物から発する砂塵に隠されました。ほとんど暗闇に覆われた私の居所は、荒墟と化した首都の真中にあり、神の慈悲を哀願する人々の叫びに満ちています。そして、大地の激動によっていまにも呑み込まれるかと怯えました。いまだ記述されず、想定すらされない極限に私は陥ったのです。どれほど続いたか、そうした状況のなかで終始居所を変えず、まったくものも言えずにいましたが、次々と起る事態について各人がさまざまに判断するのに気づき、確かな方途を得るのは困難と考えました。①

リスボン大地震を劇的な物語として論述した研究者エドワード・ペイスは、在留イギリス人の多数の報告を状況の推移に沿って並行的に提示するが、発生瞬間の記録としてリチャードの証言を第一に挙げた。彼の著書『神の怒りー一七五五年リスボン大地震』では、万聖節もミサにはまだ時間の余裕があり、サン・ジョルジェの城砦へ散歩にイギリス人牧師は、「旗竿に寄りかかって身を支え」る一方、「古城の上部、老朽化した高楼が崩れ始め、」などの表現がそのまま紹介されている。②

ゴダール　一七五五年十一月十八日付友人書簡（その二）

震動が鎮まり、煙雲が次第に消えたので、己れの無事を確かめて安堵した私は、身を寄せる部屋もなく、荒墟と

① Richard Goddard, Letter dated 18 November 1755 to his Friend. British Library Ms. Add. 69847 A-M item F pp.5-7.

② Paice, *op.cit*, pp. 68-69.

化した首都を見詰める悲哀に捉えられ、友人が被災を免れたか否かも懸念しました。しかし、私が一層憂慮したのは弟の身の上です。ポルトガル人の知己を訪ねるつもりで、彼は私より数分前に家を出たのですが、非常に心配なのは、地震の瞬間に路上にいた人はおそらく奇蹟によってしか救われないことです。自分がいまいる地点は全市のなかで当然もっとも安全であり、地震が再発した場合も、建物の倒壊で圧死する危険がありません。しかし、友人への安否を気遣い、彼らの状況を懸念する私は、ながくそこに留まれません。地震が止むまで数分そこに居続け、すぐに地震再発する怖れはないようなので、敢て丘陵から降りる決意をしました。途上では辛苦して瓦礫の山を押し分けましたが、かえってみずから生き埋めになるほどです。それでも頑張って決意を捨てず、前進を続けました。自分の抜け道を造るのに懸命でしたが、四囲に現出する幾多の惨状に戦慄せざるをえず、なにびとの顔つきも恐怖と放心に前面覆われていました。より確かな安全を求めてどこへ避難すべきかも判らずに、みな現在の位置から大急ぎで逃れていくのです。家屋の倒壊で四肢が動かず、血に塗れた人々がどれほど多いか、言い尽せません。丘陵の麓へ辿りつき、弟の邸宅を探す私は、約二〇ヤード前方で建物の一角が倒壊するのに驚き、首都壊滅の現状ではかなり難しいと感じました。この事態が否応ない論拠となって私に反省させたのは、ほかのだれもが避難するあの地点を軽率にも離れたことです。かくして破壊さた建物が四方からたえず崩れかかる大きな危険を冒し、能うかぎりの難行に耐えて私はそこへ戻りました。しかし、城砦でふたたび居所を確保するや否や、ひとつの思いが念頭に浮び、そこでの自分の立場をとりわけ不安に感じさせたのです。城砦に留まる以上、建物の倒壊で圧死する懸念は確かにないのですが、この都会において私は完全な異邦人であって、ここから離れる道も判らず、方角を尋ねる言葉も使えない身で、自分に告げられるなにごとも理解できません。こうした幾重もの難事によってどれほど私が悩んだかを、容易には推察できないでしょう。城砦へ急ぎ避難した群衆のなかに、運良く知己を見つけることだけが、唯一の希望でした。しかし、リスボンでどれほど自分が知られているかを省みると、この希望にも微弱な可能性しかないように思われました。当惑してしばらく歩き廻るうちに、異邦人らしい貴紳が目に留ります。英語を話せますか、と彼に尋ねました。まさに英語で返答されたとき、どれほど嬉しかったかを、お察しできるでしょう。彼は英国商館の貴紳で、確かに見覚えもありました。彼が物悲しく語るところによれば、最初の震動の際居合せたある貴紳が建物の倒壊で死に、みずからも奇蹟的に脱出したとのことです。地震によって損傷した建物がなお崩れつつあるので、なおしばらく城砦に留まる必要がある、と私たちふたりは結論しました。①

この間に大聖堂の広場では突塔の倒壊で数名が死去し、ペドラス＝ネグラス街でもゴダール家の邸宅が破壊された。顧客まわりに赴いた弟アンブロワーズらが、急遽自宅の付近へ戻り、知人の貿易商のトーマス・チェイズを救出した。アンブロワーズらの復路は、バイシャ地区からアルファマへの登り口、サンタ・マリア・マグダレーナ教会に通じる道路と思われる。サン・ジョルジェ城を離れたリチャードは、サンタ・ルチア展望台の方向から、無惨に崩れた大聖堂とペドラス＝ネグラス街の東端へ近づいたのであろう。破壊の凄まじさに戦慄してリチャードは弟との邂逅を断念し、他方アンブロワーズらはコレリオ古坂近くのドイツ人邸宅へまず避難した。七転八倒する住民の錯乱や、瓦礫と覆われた沿道の惨状を切々と綴るとともに、リチャードは旅人としての恐怖や肉親への深い情愛をここに吐露する。

ゴダール　一七五五年十一月十八日付友人宛書簡（その三）

自分の居所がどこよりも安全であるにもかかわらず、目の前で転回される陰鬱な光景を見詰め、気を休めることが実際にできないままでした。豪壮な建造物だけが際立って持ち堪えたのは別として、家屋、教会、僧院、宮殿が瓦礫の黒山を築きました。他方天の復讐を免れるよう民衆は必死に哀願するのです。こうした状況にあって彼らの信仰の真摯さは疑うべくもないのですが、そこに漲ぎる偶像崇拝と迷信の大いなる混合に、正直のところ唖然としました。

① Richard Goddard, Letter dated 18 November 1755 to his Friend. *op.cit.*, pp.7-9.

救われるか否かを完全に決める護符のように、十字架像や聖者の肖像を持ち歩き、熱烈に恭しくそれらに接吻するのです。そうした場で聖職者はきわめて積極的であり、群衆の祈祷を主宰し、赦免をも授けます。彼らの妄想にんらの敬意も感じないので、そうした営みの埒外にできるだけ留まることが必要でした。もしも、加わるように要求してくれれば、私たちの拒絶が彼らを怒らせたことでしょう。当方のあまり動じない態度に気づいたらしく、男たちが荒々しく近寄って、腕を捉えました。神の審判を惹き起した異端者として、私たちを城砦から突き落すため、彼らが来たとしか理解できません。どれほど警戒したか、お判りと存じます。彼らの腕を振り切るのに、傍らの貴紳よりもは一層困難でした。彼らの言葉がひとつも判らず、こちらを判らせることもできないので、私はより大きな集団の真中へ駆け込みました。しかし、まもなく彼らの温和な振舞が、乱暴される不安から私を解放してくれました。自分たちの祈祷をふたたび始め、私に加わるよう合図するのです。それはできないという気持を持ち続けましたが、彼らの言葉がすこしも判りません。それでも私の当惑から判断して、洗礼を受けるかと最後に尋ねました。拒否すれば、彼らの狂熱がどう昂じるかを懸念して、意味の判らぬよう装います。それでも私に向けて聖職者が洗礼の儀式を始めました。それが終了するや、群衆が私を取り巻いて、息詰るばかりに数回抱擁し、聖職者数名も前まで来て、新たな改宗者の膝を抱きしめ、足に接吻しました。さきの貴紳がふたたび私と一緒になり、つぎのように報告してくれました。「おまえは神を信じるか。キリスト教徒であるか。洗礼をすでに受けたか。」このように彼らが尋ねたと言うのです。「神を信じる。キリスト教徒である。洗礼をすでに受けた。」臆せず彼はこのように答え、洗礼を免れました。私については満足できる返答が得られないため、確信をもって洗礼したのです。彼らは不信心者の会話を放埒な生活の萌芽をまき散らすとみなし、その償いを求めます。彼らの迷信には共感できず、誤った信仰が是正されるよう望みます。①

サン・ジョルジェ城の敷地へは、アルファマの住民だけでなく、麓沿岸部の被災者が続々と蝟集した。城壁に沿う庭園は広大であり、数千人の群衆が、大樹の蔭や廃墟のなかに蟠踞に居座ったと思われる。カトリック教国のなかでもポルトガル人はとくに信心深い民族である。神意による懲罰と信じる群衆は、城砦でも聖像や十字架を抱き、祈祷や宗儀を繰り返した。こうした習俗を狂信的で偶像崇拝に近いと感じながら牧師リチャードは、プロテスタントである己に攻撃の矢が放たれることを怖れる。しかし、実際に彼が体験したのは、異教徒に向けられる迫害ではなく、カトリック教徒としての洗礼と祝福であった。

地震に怯えるポルトガル人の祈祷や儀式は、多くの記録に記載されるが、新たな洗礼を受けたゴダールの体験は、とりわけ奇異な出来事らしく、いくつか他ほかの被災証言でも語られている。「その日は英国商館でも祭日とされ、」とリスボン在住のある貿易商は伝える。「保養のためイギリスから数日前に来たばかりの牧師が、礼拝を司る予定でした。体力を増すよう、この貴紳は城砦の砲台まで散歩したとき、地震が発生したのです。」最初の衝撃と錯乱が鎮まると、神の赦免と慈悲を求めて周囲の群衆が祈祷を始めた。ここではプロテスタントなる異教徒であり、言葉も判らぬ異邦人にすぎぬことに、彼は慄然とする。「群衆が貴紳のまわりに集まったので、息の根を止められるかと彼は覚悟しました。神意による救いか、それは思い違いであって、脇へ来た聖職者たちにより、この貴紳はわけの判らぬまま洗礼されたのです。聖水を受けるのも断りようがありません。こうした洗礼の儀式が済むと、周りの狂信的な群衆は、新しい帰依者と錯覚する人物に、深い尊敬と友愛の情を示し、聖職者たちも跪いて彼の膝を抱擁し、脚に接吻までしました。」②

リチャードの書簡を綿密に分析したアメリカの歴史学者モレスキイは、カトリック教国ポルトガルの習俗とプロテ

---

① Richard Goddard, Letter dated 18 November 1755 to his Friend. *op.cit.*, pp.9-11.

② Anonym, *An Account of the late dreadful earthquake and fire, which destoroyed the city of Lisbon. in a letter from a merchant resident there, to his friend in England. London,* 1756. pp.17-18.

スタントであるイギリス人の信仰を対比し、サン・ジョルジェ城における宗教的体験に論文の主要な部分を宛てている。「リスボン壊滅の最中で生じた」と彼は強調する。「やや滑稽な撞着、ゴダールの当初の恐怖とポルトガルの粗野な風習の撞着は、その異常な一日を皮肉にも証左するものである。」こうした情景を頂点とするこれらの書簡全体について、さらにモレスキイは多文化の複合という視点からも高く評価する。「オクスフォード出身の教養豊かな聖職者、富裕で由緒ある家系の貴紳、そしてイギリス人貿易商の兄であるリチャール・ゴダールが、ヨーロッパ最大の災害を独自の国際的視点で叙述している。多文化を複合した十八世紀リスボンにおいて、宗教的、倫理的、社会的次元でのさまざまな相互関係が、大地震によって峻厳な試練を受けた。反カトリック的な偏執と驕傲にも拘わらず、彼の書簡の根底を貫くものは、ともに震災を耐え忍んだポルトガル人への共感である。」①

ゴダール　一七五五年十一月十八日付友人宛書簡（その四）

しかしながら、いまや私たちは地震よりも一層怖ろしい災厄が目前に迫ることに緊張しました。数ヵ所から立ち昇る煙雲によって、リスボンの被災地が焼尽すると確信したのです。高層の建築と狭隘な道路のため、リスボンにおける消火活動はいつもきわめて困難です。いまやそれもまったく不可能となりました。当日教会では万聖節を祝うため、平素より沢山の燭台と蝋燭が煌々と輝き、そこから火焔が燃え上ったと推測されます。地震の瞬間にどの教会も参拝者で満ち溢れ、どこも強烈な衝撃に耐ええず、無数の人々を破局に追込みました。ほぼ約三万人が死亡したと、一般に認められています。被害についてさまざまな見方もありますが、異邦人はほとんど奇蹟的に救出され、総数からすればきわめて少数の人たちが亡くなりました。城砦へ一時頃逃れてきた来た一家が、これから行動をともにするよう助言してくれました。近郊にある友人の家が確実に安泰であり、彼らはそこへ避難すると言うのです。喜んで私が受け入れたことを、ご理解頂けるでしょう。そこへ行く途上で私は、弟と彼の同僚が無事であることを耳にします。また、弟の邸宅が全壊したことも知りました。神に感謝します。身を置く部屋、横たわるれる寝台、覆える毛布、そして口にできるパンに恵まれています。火災は数日間続きました。消火の活動が開始され、いまや十八日目であるのに、なお小さな震動の続発に怯えているのです。②

リスボンの災厄を倍加したのが、王都全域を席巻する大火であった。比較的強靭に地震に耐えた高台の建造物も、連日の火災によって壊滅した。ペレイレ・ダ・ソーサの大著『リスボン大地震一七五五年十一月一日ーその人口学的研究』によれば、大火に包まれたアルファマの教会は、大聖堂やサント・アントニオ教会など二五の宗教施設である。③ 城壁の内側にも街路が敷かれ、若干の建物や住宅も存するが、ルコルトメント街の福祉施設は大火の火元となった。避難民の眼前でサンタ・クルズ城砦教会も炎上し、城砦の火薬庫が爆発するとの流言が飛んだ。幸運にもリチャードはイギリス人一家と城砦で出会い、ともにリスボン近郊のマルベラへ避難する。この書簡は地震発生から十七日後同地で綴られたものである。

第三節　津波の襲来と近郊への避難

リチャードの書簡の要旨を綿密に紹介した文筆家ペイスは、それらがいまだ印行されず、三通の手稿のみ保存されると誌す。すなわち、一七五五年十一月七日付長兄トーマス宛書簡が郷里のウェルトシェア＝スヴィンドン古文書館

---

① Mark Molesky, *op.cit.*, pp.84, 89.

② Richard Goddard, Letter dated 18 November 1755 to his Friend. *op.cit.*, pp.11-12

③ F. L. Pereira de Sousa, *O Terremoto do 1 Novembro de 1755 e um Estudo Demografico*. Lisbon, 1932. volume III, grave II.

に、また同年十月二二日付トーマス宛書簡と十一月九日付友人宛書簡が大英図書館稿本部に蔵される。他方二〇一二年ゴダールに関する学術論文を初めて発表したモレスキイは、大英図書館に保存される書簡について一七五五年十月二二日付書簡、同年十一月十八日付書簡、一七五六年二月十日付書簡、同年三月三十日付書簡の四通であると述べる。①

筆者自身について言えば、手稿の複写を取得し、一応読解できたのは、一七五五年の十月二二日付書簡、十一月十八日付書簡、および一七五六年二月十日付書簡の三通である。これらは闊達な筆記体で綴られているが、長年の歳月と雨露等によって全体的に文字が滲み、しばしば汚染で文脈が途切れている。

これらのなかで一七五六年二月十日付で友人に送付された手紙は、とくに長文で用箋十八頁に及ぶ。モレスキイの調査によれば、この友人とはラコック修道院の改革者ジョン・イヴォリ・タルボットと推察される。一七五三年修道院の聖堂再建を企画したタルボットに、リチャードは建築家アンダーソン・ミラーを推挙し、代表的な新ゴチック建築が完成したのである。② なお、修道院を相続したフォクスはここで光学の研究を進め、一八四〇年初期の写真技法カロタイプを発明した。

この書簡の冒頭から第十一頁までは、十月二二日付書簡とほとんど同じ内容で、地震の発生より洗礼の儀式に至る。ここではさきの書簡よりやや詳しい叙述も見出されるが、多くの段落で同一の語句や表現が使われている。しかし、後半の記述においてまず津波の状況が新たに付加された。

ゴダール　一七五六年二月十日付友人宛書簡（その一）

発信：リスボン、一七五六年二月十日

このときさらに私たちを慄然とさせたのは、海嘯が押し寄せ、首都の低地帯全域がすでに水没したとの情報です。頂上に位置し、安全な場所である城砦へ逃れてきた人々がこれを裏書きしました。英国商館に属する一家、数人の貴紳と貴婦人から成る一家もこうした情報によって城砦へ駆け登ります。彼らはこちらへ近づき、私の弟について尋ねました。まだリスボンへ来たばかりですが、先週の日曜日に説教をしたので、思いのほか知られていたのです。弟について確かな報告はできないのですが、すべての家族が脱出できたことに狂喜し、破滅を免れた人々のなかに彼も含まれるのではないかと、実際に希望を抱きました。また、私自身についてもふたたび多くの朋友と共にいることを、かなり嬉しく感じました。しかし、洪水の情報に接し、水害を憂慮して私たちは、己自身や朋友の行末に暗澹たる想いでした。そして、奇妙な話とお思いでしょうが、実際に地震の様相は陸上に劣らず、河川においても凄惨でした。船上にいた数人の船長から聴いたところでは、河川で最初の震動を受けたとき、だれもが座礁と思いました。船舶が激しく揺れ、いまにも身が砕かれると感じたからです。水上よりも市中が格段に安全と信じたため、地震の被害としてもっとも凄絶な光景がそこから展開されました。震動は陸上でも船上でも同じ長さで、それが鎮まって、灰燼の雲も消散すると、廃墟と化した首都の陰鬱な遠望が現れ、以前とは一変した情景に人々は身震いします。岸辺へと藻掻き、救助を求める人々の叫喚でなお恐怖が増したのです。大理石できわめて頑丈で堅固に造られた巨大な埠頭が海岸から消失し、水際へ逃れてきた無数の人々が、その上から押し流されました。ひとつの遺体も見当たらず、彼らが携えた聖書もありません。人体も聖書も浮上しないので、埠頭がすっぽり呑み込まれた思われます。水位標の頂点を数フィート超えており、水深の測定によって長大な深さと判りました。（地震のあとこの種の測定に関心を持っています。）すこしでも人類愛を抱く身であれば、こうした艱苦のなかでみずから被災者を多少とも支援することを拒みはしないでしょう。牧師たちは希望する船客に携帯できる聖書を送りました。水上だけが安全な場所としばしば見なされたので、そうした被災者は稀ではありません。ただし、すぐさま彼らも危険が伴うのを認めました。高潮は突

① Molesky, *op.cit.*, p.78.　Paice, *op. cit.*, p.268.

② *Ibid.*, *op.cit.*, p.78.

然押し寄せ、すべての小舟が岸に乗り上げました。さらに大河へなだれ込んだ海流は、山塊のような高波をなし、障壁を越えて氾濫したため、もっとも老練な船乗りも驚倒し、必然的に首都は壊滅の危機に曝されました。この高潮は二十フィートの高さに及び、五分近く続きます。船の多くが走錨し、ほかもその寸前にありました。錨綱が絡み合い、相互に衝突することを、どの船でも一番怖れたのです。そうした危険を避けるため、大抵は錨綱を切り、河岸へ寄りました。海嘯は上げ潮の際とほぼ時間をかけて退きました。上げ潮は通常よりも高く隆起し、引き潮も同じ程度低く沈下しました。不規則な震動とともにそれは数時間続き、次第に鎮りました。しかし、潮汐は夕方まで通常の流れと違いました。かくも激烈な氾濫の結果、障壁が崩れ落ち、作業所の木材が水浸しとなり、屋根が突き砕かれ、かなり離れた内陸部に大きな船体が置き去りにされました。これらすべてが民衆の動顛を倍加させ、彼らは安全な地を得ることにもはや絶望しつつも、怯えながら身の置き場を求めて、雲霞のように荒墟を走り廻ったのです。①

みずから津波に直撃されたわけではないが、リチャードの書簡もまたペドラ埠頭の惨状をはじめ、襲われた沿岸部の様相を如実に伝えている。水没する沿岸部を城砦から脚下に見おろし、逃れてきた被災者にじかに接した彼である。近郊マルヴェラへは王宮河港から航路もあるが、沿岸部の氾濫と運航の中止を知り、リチャードらは陸路を選び、王都東端の市壁と市門へ向かった。二月十日付書簡はこうした避難の報告で結ばれるが、つぎに訳出する部分は数カ所が帯状に浸蝕され、解読がとくに困難である。

ゴダール　一七五六年二月十日付友人書簡（その二）

城砦から私たちは出立しましたが、多くの困難が伴い、危険もありました。婦人たちも瓦礫を踏み越え、オリーブの庭園まで来ると、領事ヘイ様がおられました。彼こそ地震のあと最初に見た知人です。領事夫人は十日前に女の子を出産されたばかりでした。最初の震動のとき彼女はベッドに座っていたとのことです。両側の壁が割れ始めたため、乳母の腕に支えられて階段を降り、震動が続く間ロッジに身を置きました。最初の衝撃で屋外へ出た領事は、引き返して夫人を見つけ、自分の上着を彼女に着せたのです。第二の震動のときはそこにいて、障壁が愕然とするほど破損したものの、家屋の倒壊は幸いにも免れました。幾人かによってそこから半マイルほど先へ運ばれ、オリーブの樹のもとへ避難されたところへ、私たちが来たのです。家族と一緒に脱出された幸運を祝福しましたが、領事はなお難渋な面持でした。ヘイ夫人はほかの衣類を持ち合せず、偶々居合せた女性から借用したそうです。そのような状況の夫人が外気に曝されるは命にも関わるので、安全に避難できる家屋を従僕たちは探し廻りますが、・・・しばらく木陰に彼女を休ませたあと、近郊にある伯父の山荘・・・に辿りつけると判断されました。その山荘へ私も一緒に避難するよう、親切に領事は勧めましたが、彼の重荷となるよりも、すでに諒解を得た人々と同行を続けることにしました。領事と分かれる前に、運良く弟の従僕と会いました。家政婦は別として、弟と弟の同僚、さらには係累の全員が無事であると、彼らは知らせてくれました。最初の震動のとき邸宅の一角が崩れて、家政婦は強い打撲を受け、半時間後に死亡したのです。地震発生のほぼ五分前に弟は僥倖にも自宅に帰り、震動の間中そこで耐えました。その後も弟は難を免れ、すでにパケット定期船に乗っています。②

ドイツ人貿易商の邸宅にひととき身を寄せたアンボワーズら、その後どこに身を寄せたかは不明である。地震による航行の障害が著しく、潮の満ち退きも不安定なため、大海へ乗り出すのは困難とされた。しかし、すべての船舶にリスボンからの出港がしばらく禁止された。十一月十九日にパケット船の運航が再開され、アンボワーズは兄より

① Richard Goddard, Letter dated 2 Febrary 1756. *op.cit.*, pp.23-26.

② Molesky, *op.cit.*, pp.88-89. Paice, *op.cit.*, pp.134.

先にイギリスへ帰った。

健康を害した英国商館の司祭ジョン・ウィリアムソンも急ぎ帰国し、職務の代行をリチャードは懇請される。長期の滞在に備えて、領事ヘイの別荘に迎えられるが、彼の心底は悲嘆の地を一刻も早く離れたいのみであった。これらマラベルにおけるリチャードの消息は、一七五六年三月三十日付書簡に記述されたようである。①

リスボン大地震の三年後、一七五八年五月二日リチャードは郷里スウィンドンで三十歳にして夭折した。② 中世以来の家乗を誌した『コダール家覚書（北ウェルトシェアー）』にはリスボンでの出来事について一行のみ書かれている。アンボワーズ・ゴダールは「一七五五年大地震の際リスボンにいて、一家のうち彼だけが脱出した、」と。リチャードが生き残ったことは明白であるが、震災による艱苦と心労によって夭折したのであろう。

イギリス人居留者の生命を健康が多く失われたのに加え、経済的な被害も莫大であった。商館の貿易商ジョゼフ・メイは一切の現金と証券を失い、四千ポンドを弟から貸与される。ワインと織物を取引するドンカン・クラークは七百ポンド相当の品々、百八十ポンドの現金を保持したが、二千ポンドの借り入れを業者に求めた。ゴダール、ブランフィル、ジャクソンの共同事業も大打撃を受け、ブランフィルの伯父、シティの貿易商ウィリアム・ブラウンドから再起の資金として一万二千五百ポンド、八年間分割払いの融資を受けた。しかし、多くの貿易商は以後もリスボンで事業を営み、英国商館一七五六年の名簿にはメイやヘイクとともにアンボワーズ・ゴダールも記載されている。王都復興のためイギリス人技術者と建築材料の需要が激増し、衣料品や食料品の払底が彼らの企業に好条件となった。③

ウインチェスター学園で貿易商としての教育を受けたアンボワーズは、一七七二年イギリス郵政局の駐リスボン代理人となり、同年ヴィルトシェア州選出の国会議員に推挙された。④ 以後一九世紀にゴダール家は地元における運河と鉄道の建設にも参画する。最後の家長である外交官フッツロイ・P・ゴダールは一九二七年に逝去し、第二次大戦中は軍用施設としてその城館に英米連合軍が駐屯した。⑤

初稿：二〇一四年一月　七日
改稿：二〇一九年八月二四日

① Richard Goddard, Letter dated 2 Febrary 1756. *op.cit.*, pp.28-30.
② Molesky, *op.cit.*, p.89.
③ Paice, *op.cit.*, p.182.
④ Molesky, *op.cit.*, p.79.
⑤ Goddard Familly, *Wikipedia.* on-line.